GRL NEWS
Gender Research Library
Nagoya University

名古屋大学
ジェンダー・リサーチ・ライブラリ

No.3

2019年1月発行

水田珠枝先生による フェミニズム基礎理論講座が開催されました

名古屋大学GRLでは、2018年9月14日、10月12日、11月9日の日程で、水田珠枝先生（名古屋経済大学名誉教授、公益財団法人東海ジェンダー研究所顧問）によるフェミニズム基礎理論講座を開催しました。

水田先生は日本におけるフェミニズム研究の碩学であり、いずれの回も会場が満員になるほど多くの人が講座を聴きに来館されました。聴講者の内訳も、長年フェミニズムを研究されてきた方から学部生までと、幅広い職業・年齢にわたっていたことが印象的でした。

今回の連続講座は全体として、社会思想の古典をふまえ、女性学、ウーマンリブ、ジェンダー論等を含むフェミニズム史を通して、現代につながる基本的課題を考えていくというものでした。

第1回「フェミニズムの生誕――18世紀」では、近代における社会変化とそれに呼応した近代思想の変化をホッブズ、ロック、ルソーに即して解説された後、オランプ・ドゥ・グージュとメアリ・ウルストンクラフトというフェミニズムの二人の先駆者について講義されました。特に、ウルストンクラフトについては、彼女の生い立ちから18世紀の自然権思想との関連まで、多岐にわたって掘り下げられました。

第2回の「フェミニズム論争――19世紀、功利主義とマルクス主義を中心に」では、功利主義とマルクス主義という19世紀を特徴づける社会思想が、とりわけ女性の参政権についてどのように論じていたのかというお話が中心でした。水田先生は、ただ単に「誰が何を言った」ということだけでなく、なぜそのような思想が生まれてきたのかということを、時には軽い冗談も交えながら話され、聴衆を惹きつけていました。

講座の締めくくりとなる第3回「生産と再生産の再編成――20～21世紀、個人・家族・社会および国家」では、福祉国家化、帝国主義化、新自由主義化といった現代につながる社会変化が、女性をどのように位置づけるものであったのかがテーマでした。水田先生は、フェミニズムの今後のためには、男女両性の意識変革のみならず、家父長制家族からの脱却や、女性の経済的自立と家事労働の社会化が鍵になると指摘されました。

各回に設けられた質疑応答の時間では、参加者からの質問が途切れることなく、水田先生、ときには司会を務められた名古屋市立大学名誉教授で東海ジェンダー研究所顧問の安川悦子先生がどの質問に対しても丁寧に回答されていらっしゃいました。そして、講座参加者の多くから、今後も水田先生による講座の開催を求める声が聞かれました。

2018年度連続セミナー企画「LGBTとセクシュアリティからジェンダーを考える

名古屋大学GRLでは、2018年度の連続セミナー企画「LGBTとセクシュアリティからジェンダーを考える」を実施しました。これは、近年いわゆるセクシュアル・マイノリティについての研究が盛んになっていることや、名古屋大学でも2018年5月に「LGBT等に関する名古屋大学の基本理念と対応ガイドライン」が作成されたことを受け、各回に外部から専門の講師をお呼びして、LGBTないしセクシュアル・マイノリティ研究の最前線を知るために企画されたものです。

記念すべき第1回（7月20日開催）となった加藤秀一先生（明治学院大学・教授）による「ジェンダー／セクシュアリティ研究の古くて新しい課題たち――生物学、性教育、LGBTをめぐって」は、かつての「ジェンダー・フリー」教育やリベラルな性教育に対するバッシングに対して、人文・社会科学が的確な反論をしてこなかったことを反省しつつ、性差別・性抑圧に立ち向かうための方向性を示すものでした。セミナーでは、性教育や性差に関する最近の生物学も題材として紹介され、性差を再び生物学化する流れにどのように対抗するべきかについて、鋭い問題提起がなされました。ジェンダーやセクシュアリティについて学ぶ際に、どうしてもネックになる性差についての生物学的知見と、私たちはどのように付き合っていくべきか――加藤先生からは今回の連続セミナーの初回にふさわしい、全体の土台となるアイディアを提供いただきました。

続く第2回（9月29日）は風間孝先生（中京大学・教授）による「寛容の罠――なぜ府中青年の家裁判はゲイ（・メディア）から批判されたのか」というご講演でした。風間先生は、「府中青年の家」裁判に原告当事者として関わったご経験も交えつつ、なぜ当裁判に関わった同性愛者たちが一部のセクシュアル・マイノリティ自身によって批判・非難されたのかということを、異性愛社会からの「寛容」という概念を切り口にして講演されました。そして、LGBTなどのセクシュアル・マイノリティが社会に対してその存在を「寛容」してもらう、という構図からの脱却が必要であることを指摘されました。セミナーでは、そもそもの「寛容」概念についての整理から、「府中青年の家」裁判に対するゲイ・メディアからの反応やLGBTバッシングについてまでと、幅広い議論がなされました。

第3回（11月16日）は、森山至貴先生（早稲田大学・専任講師）による「セクシュアル・マイノリティの社会運動――なぜ連帯は難しいのか」でした。森山先生は、日本におけるセクシュアル・マイノリティの社会運動の経緯について触れ、なぜそれらの社会運動において有機的な連帯が困難なのか、論点を整理することで、「LGBT」として一括りにされるセクシュアル・マイノリティの内部で見逃されるさまざまな相違点を浮き彫りにされました。結論として森山先生は、セクシュアル・マイノリティの社会運の中で分離されつつあった承認と再分配を再び結び付けることの重要性を主張されました。

いずれの回も、学部生や大学院生といった若手から活発な質疑が発せられ、議論も大いに盛り上がりました。また、連続セミナーの期間中、GRL図書室ではセクシュアリティ論や性的マイノリティを扱った書籍や講師の先生の著作を紹介するコーナーを設け、多くの方にご利用いただきました。この連続セミナーを通じて、セクシュアリティやLGBTをめぐる社会的な課題について議論を深める際に、GRLが果たしうる役割が明確化されたように思います。

※なお、今年度の連続セミナーの最終回は、2019年2月9日（土）15:00～名古屋大学GRL2階レクチャールームにて、小澤かおる先生（首都大学東京・客員研究員）を講師にお招きし、「マイノリティの情報保障――性的少数者を例として」と題して開催します。ぜひご参加下さい。

雑感：イスラーム教育とジェンダー研究

（教育発達科学研究科　教授）
服部美奈

筆者の専門領域は比較教育学・教育人類学という分野である。学部の頃から人の価値形成に宗教が与える影響に関心を持っていたため、未知の存在であったイスラーム、そして多くのムスリム（イスラーム教徒）を擁するインドネシアを研究対象に選んだ。

研究をはじめた当初はジェンダーに焦点をあてる予定はなかったのだが、訪れたインドネシアで出会うムスリム女性の華やかで生き生きとした姿に心を揺り動かされた。その姿はメディアで固定的に語られるムスリム女性の姿とはおよそかけ離れたものだった。彼女たちは自分が女性であることに誇りをもち、積極的に社会で活躍していた。同時に、イスラームの二大法源であるクルアーン（コーラン）とハディース（預言者ムハンマドの言行録）を人生のかけがえのない指針としていた。

研究を進めるうちに、インドネシア（当時はオランダ領東インド）では20世紀初頭にはすでにムスリム女性の教育の必要性が主張され、女性たちによって学校が設立されていること、同時期に「天国は女性の足元にある」というハディースの言葉がムスリム女性を勇気づけたこと、女性たちが発行する雑誌のなかで一夫多妻や離婚をめぐる問題に対する議論が盛んになされていたことなどから、同じ世界でともに生きる同胞としてムスリム女性を身近に感じるようになったことがジェンダーを考える契機となった。

しかし、言うまでもなくムスリム女性は「ムスリム女性」として一括して語られる存在ではない。彼女たちは、様々な場面でムスリム女性に対する多様な言説を受け取りつつ、自らの生き方を選択してゆく。イスラームの教義がそれぞれのムスリム女性たちによってどのように解釈され、自らの人生の指針が形づくられてゆくのか。研究ではそれをできる限り忠実に描き出したいと考えている。

イスラーム社会はしばしば空間を男女で分ける。女性空間には特有の安堵感と解放感がある。スカーフをはずし気楽な格好で女子トークが始まる。そこでは目からウロコが落ちるような女性たちの本音を聴くことができる。これは女性研究者の特権である。イスラームは、日本の知、西欧の知を相対化する魅力をもっている。私はこれからもその空間に浸りながら世界を相対化し、ムスリムの人々の知の営為にたずさわっていきたいと思っている。

男らしくないとされる人達に目を向けて

（名古屋大学大学院人文学研究科博士後期課程2年）
游書昱

私は男性性研究を専門にしており、メディア・文学テキストにみる男性像を取りあげて男性性のあり様について考えている。どういう研究なのかというと、まずは子供の頃の話から入りたい。子供の頃、ある日友達とお菓子を買いに行った。イチゴの好きな私がイチゴ味のお菓子を買ったら、友達に「女の子かよ！男はチョコだろうが」と言われた。その時、私はこの一言に大きな違和感を覚えた。どうしてイチゴ味のお菓子を好んで食べると、私は男の子でなくなるのかと。イチゴの味が甘酸っぱいからなのか、そのパッケージが赤っぽいからなのか、いろいろ考えてみたが、答えは出てこず悶々としていた。ただ、男性は常に周りから男性のあるべき姿を求められ、その期待に応えられなければ男性というカテゴリから除外される危機に晒されるということが分かった。しかし、男性のあるべき姿とは何なのか。

男性性という言葉を聞くと、多くの人はすぐに男らしさという言葉を思いつくのではないだろうか。男らしさなら何を連想するのかをあらためて聞くと、虫を素手で掴める、スポーツ万能、豪快さといった事象が躊躇なく挙げられていくのは想像に難くない。そこで、なぜ男性にこういったことを求めるのかと問い詰めると、「男なんだから」という非常に曖昧な答えを返されることが多々あると思われる。「男なんだから」の裏には「女じゃあるまいし」という意味が隠れているということを考えると、男のあるべき姿＝男らしさは、女らしさを比較対象としつつ明確なようでありながら、じつはぼんやりとした概念なのである。にもかかわらず、私達は男性に男性のあるべき姿と称して男らしさという固定的概念を求め続けてきた。私はこの状況に対して疑問を抱かずにはいられない。かつて黒人フェミニストのベル・フックスは「私は女ではないの？」と問い、人種問題の提起を通して女性というカテゴリの均質化を問題視し女性の複数形を前景化したのだ。翻って考えれば、女性学の経験を踏まえ、男らしさ自体と男性というカテゴリの問い直しも要請されるべきであろう。

私の研究はそういう問い直しを目標として進んでいる。男らしさを求められた時、男性全員が上手く応えられるわけはない。そして、上手く応えられない人達の男性性は男らしくないものとされ、彼らは長い間抑圧され不可視されてきた。そこで、彼らに光を当て、それぞれの男性性がどのように嫌悪の対象とされたのかと問うことは、男性性の複数性を明らかにし、さらには男らしさと男性というカテゴリの問い直しにも繋がると考えているのである。

私は世の中の人達がありのままでいられることを願いつつ、これからも上手く社会の求める男になれない、もしくは男らしさに背を向ける人達の物語を大切にしていきたい。

お知らせ

GRL図書室の人気貸出し本

GRLが開館した2017年11月1日から2018年11月30日までの約1年間において、図書室で最も貸し出された図書が以下のものになります。

順位	書誌事項	請求記号
1	ジェンダー・トラブル : フェミニズムとアイデンティティの攪乱 / ジュディス・バトラー著 ; 竹村和子訳. -- 青土社, 1999.4.	367.1||Bu
2	女性はなぜ活躍できないのか / 大沢真知子著. -- 東洋経済新報社, 2015.3.	366.38||Os
2	セクシュアリティの心理学 / 小倉千加子著. -- 有斐閣, 2001.5. -- (有斐閣選書).	143.1||Og
3	セクシュアリティの多様性と排除 / 好井裕明編著. -- 明石書店, 2010.11. -- (差別と排除の「いま」; 6).	367.9||Yo
3	はじめてのジェンダー論 / 加藤秀一著. -- 有斐閣, 2017.4. -- (有斐閣ストゥディア).	367.1||Ka
3	ジェンダー / 加藤秀一, 石田仁, 海老原暁子著. -- ナツメ社, 2005.3. -- (図解雑学 : 絵と文章でわかりやすい!).	367.1||Ka
4	LGBTを読みとく : クィア・スタディーズ入門 / 森山至貴著. -- 筑摩書房, 2017.3. -- (ちくま新書 ; 1242).	367.9||Mo
5	わたしはマララ : 教育のために立ち上がり、タリバンに撃たれた少女 / マララ・ユスフザイ, クリスティーナ・ラム著 ; 金原瑞人, 西田佳子訳. -- 学研パブリッシング.	289.2||Yo
5	愛について : アイデンティティと欲望の政治学 / 竹村和子著. -- 岩波書店, 2002.10.	367.9||Ta
5	仕事と家族 : 日本はなぜ働きづらく、産みにくいのか / 筒井淳也著. -- 中央公論新社, 2015.5. -- (中公新書 ; 2322).	366.7||Ts
5	女ぎらい : ニッポンのミソジニー / 上野千鶴子著. -- 紀伊國屋書店, 2010.10.	367.1||Ue

図書室にジェンダー入門書・参考図書コーナーを設けました

2019年1月より、ジェンダーについてはじめて学ぶ人に向けた入門書および参考図書コーナーを、GRL図書室の入り口すぐのところに設けています。いずれの本も手に取りやすく読みやすいものですので、「ジェンダーについて知りたいけど、何から読めばよいのかわからない」という方は、ぜひこのコーナーにお立ち寄りください。

ご寄附のお願い

GRLは、ジェンダーに関する研究、教育、研究者の育成、ならびに男女平等意識の啓発、普及に向けて、フェミニズム、ジェンダー研究に関わる図書、雑誌、リーフレットやパンフレットなど、多様な文献、史・資料を蒐集・保存するとともに、研究者はじめ学生、市民など多くの方々に利用いただくことで、ジェンダー研究を実践的に発展させていくことをめざしています。

GRLのようなジェンダーをテーマとした研究活動施設は全国的にも珍しく、その個性的でユニークなありかたは、21世紀の知のパラダイム・チェンジに貢献しうる大きな可能性を有しています。GRLがジェンダー研究を深化させ、その成果を社会に還元できる知の拠点へと成長していくためには、文献、史資料を散逸させることなく、蒐集、保存、整理し、広く提供できるライブラリ、アーカイブの存在が不可欠です。

GRLが、先人たちの知の営みを次代に継承していけるよう、みなさまのご支援を賜りたく、お願い申し上げます。ご寄附金等をいただける場合には、こちらのメール(grl@adm.nagoya-u.ac.jp)までお知らせ下さい。

お問い合わせ: grl@adm.nagoya-u.ac.jp
電話: 052-789-5111 (代表)
アクセス: 〒464-8601 名古屋市千種区不老町
地下鉄名城線「名古屋大学駅」1番出口より徒歩1分

GRL 名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ
Gender Research Library Nagoya University